

2018年11月26日

熊本放送文化振興財団 御中

徳永直の会

会 長 高木陽助

助成金等使用実績報告書

報告者 徳永直の会

代 表 高 木 陽 助



事業題目 徳永直 没後60年記念事業

助成金額 ￥100,000

助成金の使途 別紙会計報告書に記載

事業実施結果 詳細は別冊「時空を超えて～徳永直の『追憶』」に記載

- ・平成30年2月12日(月)・「孟宗忌」
- ・平成30年5月26日(土)・講演会

以上

徳永直の会 助成金 報告

平成30年6月8日

添付書(1) 実施事業の具体的説明

1, 実施事業 (A) 徳永直没後60年記念孟宗忌

期日：平成30年2月12日(月)午後(1時半受付)2時開始

内容：1) 黙禱

2) 献詞 (会長)

3) 献酒 (代表和田崇氏)

4) 献花 (参加者全員)

5) メッセージ(「佐藤三千夫記念会」事務局長の金野文彦氏)

6) 諸連絡・緒方事務局長より「偲ぶ会」の案内や諸連絡。

参加者：21名の参加があった。遠く宮城県や福岡からも参加された。

(B) 徳永直没後60年記念講演会

期日：平成30年5月26日(土)12時半受付、13時開始。

会場：くまもと県民交流館パレア第1会議室

(準備、朗読会のリハーサル等のため午前中会議室4を借りる)

内容：13時開始

参加者 一般102名、実行委員と公演者22名)計124名

1) 熊本朗読研究会による朗読劇「他人の中」

・徳永直原作、徳永瑞夫脚本「他人の中」を本日の公演のため、池田義一氏が潤色したもの。

徳永直16歳の春、近所の米屋に丁稚奉公した時の体験が基になっている作品。売られ行くツルの身が悲しい。

2) 直木賞作家中島京子氏による講演。

演題は「徳永直の『追憶』」

中島氏と徳永直の出世作『太陽のない街』とのつながり。

永年住んだ場所のすぐ近くが『太陽のない街』の背景となった若荷谷であったこと。印刷関係の会社が多いこと。小石川植物園と近いこと。ナチスドイツで徳永作品が焚書されたことなど。

『追憶』に関する説明。徳永直の中で関東大震災から昭和21年までつながっている問題。現代につながる深い視点について述べられた。

3) パネルディスカッション

パネラー：中村青史氏(元熊本大学教授)、浦田義和氏(久留米大学客員教授)、金野文彦氏(佐藤三千夫記念会事務局長)、和田崇氏(三重大学教育学部準教授)

・和田氏は徳永直が徳富蘆花に次いで世界的な作家であることを様々な証拠を挙げて力説された。フランス、ドイツ、ロシア、中国、スペイン、オランダ等に翻訳されて享受された。

・浦田氏は宮地嘉六と徳永を比較しながら説明された。

・金野氏は徳永の「日本人佐藤」について篤く語られた。

・中村氏は全体のまとめ役として各発表者をリードされた。

『太陽のない街』の作者としてしか認識のない人達に、徳永文学がいかにも多くの国の人々に読まれてきたか、海外への飛翔をとげたかを力説された。

* 参加者総勢124名の素晴らしい講演会であった。各方面の方々に感謝したい。

平成30年6月 徳永直の会 会長 高木陽助



徳永直没後60年記念事業 収支決算書

(1) 収入の部

自己負担金	209,299	期成会会費
参加費(資料代)	102,000	講演会、シンポジウムの資料代1,000×102名
協賛金	200,000	徳永直の会より
書籍売り上げ	0	
助成金	670,000	くまもと21ファンド
助成金	100,000	熊日文化スポーツ基金
助成金	100,000	熊本放送文化振興財団
合計	1,381,299	

(2) 支出の部

項目	金額	備考	領収番
講師謝礼	270,000	講師1名 150,000 講師2名 50,000×2 講師1名 20,000	1
旅費・宿泊費	42,400	講師旅費(熊本→東京)、宿泊費、タクシー代	2
会場借用費	20,480	パレア第1・第4会議室、付帯施設費用を含む	3
会場看板料	23,061	横吊り下げ看板、縦看板、題字揮毫、パネラー表示等費用	4
広報費・配布資料印刷製本費	302,400	広報用チラシ9,300枚(孟宗忌・講演会用) 徳永直作品集Ⅲ印刷代(200部)「追憶」	5
没後60年記念特集号作成	442,800	テープ起こし、印刷・製本代(300部)	6
通信費	52,350	切手、封書、ハガキ、郵送料・報告集郵送費	7
事務諸経費	52,280	印刷機インク代、コピー代、文具、封書印刷、事務連絡、用紙代	8
準備委員会会場費	16,500	記念事業実行委員会会場使用料 2,000円×6回、1,500円×3回	9
孟宗忌関係経費	7,868	垂れ幕用布、題字記入謝礼、献花用花束、献酒用酒代	10
朗読脚本作成費	24,970	朗読劇用脚本製作費(25部)	11
音響設備・操作費	80,000	会場での音響設備費、音響操作費(専門家3名)	12
朗読会へ謝礼	10,000	くまもと朗読研究会さまへの薄謝	13
会場設営・受付役務費	30,000	受付、会場設営等の役務費	14
その他(雑費)	6,190	クラフトテープ、セロハンテープ、胸花、お水	15
合計	1,381,299		

(3) 収支決算

$$1,381,299 - 1,381,299 = 0$$
代表 高木陽助 

熊本が生んだ世界的作家

徳永直 没後60年

記念講演会報告書



徳永直の『追憶』

時空を超えて

徳永直没後60年記念事業期成会

徳永直没後六〇年に寄する献詞

徳永直没後六〇年記念事業期成会会長 高木陽助

徳永直さん、あなたがあの世に旅立って六〇年の月日が流れました。

明治三十二年、極貧の家庭に生まれ育ったあなたは満足に小学校にも通えませんでした。小学校時代は、竹箒つくりや荷馬車引きの手伝いなど、家族を支えるいっぱしの労働者でした。印刷工場の見習い、新聞社の文撰工、阿蘇黒川の発電所など少しでも高い賃金を求めて転職し、二十三歳の時、労働組合運動に手を染めたあなたは、まるで「石もて追わるる」ように上京したのです。勿論、当時はあなたを暖かく迎える故郷熊本ではありませんでした。

しかし、時代は巡ってあなたが亡くなって二十一年に、あなたの立派な文学碑が、多くの有志によって建立されました。故郷熊本があなたを温かく迎えたのです。没後五〇年にはあなたの素晴らしい文学を顕彰する大々的なイベントが開催されました。朗

読会、講演会、シンポジウム、そして文学選集の発行。「お帰りなさい、徳永直」のもとに、多くの人々が物心両面から記念事業を支えたのです。今や徳永直は熊本県民にとって、押しも押されぬ「近代文化功労者」なのです。

あなたが亡くなって六〇年。経済至上主義によって真に大切なものが失われつつある今日、あなたが残した膨大な遺産を真剣に読み解くことで、私たちにとって何が本当に大切なことか、何を大事にして生きて行くべきか、私たちの一人ひとりが考えなければなりません。あなたは貴重な材料を与えてくれました。

徳永直さん、有り難うございました。

立田の山懐に抱かれて、ゆっくりお休み下さい。そして、我々を見守り下さい。

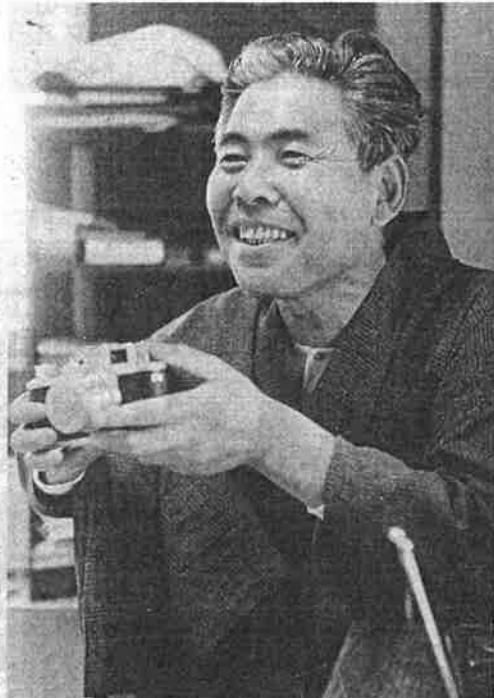
現代につながる深い視点

没後60年 徳永直

熊本市出身のプロレタリア作家・徳永直(1899～1958年)の没後60年を記念した講演会が、5月26日に熊本市であった。作家や研究者らが代表作『太陽のない街』や『追憶』を取り上げ、世界で読者を獲得した作品のスケールの大きさや現代につながる深い視点を指摘。集まった約100人に「徳永直の再評価」を求めた。

徳永は黒髪尋常小卒。印刷会社や新聞社などで職工として働きながら、1929年、印刷会社の労働争議を描いた『太陽のない街』を発表。『蟹工船』の小林多喜二と並び、プロレタリア文学の旗手とされる。

「徳永直とは、縁のようなものを感じている」。かつて出版社に勤めていた直木賞作家の中島京子さん(54)は講演



徳永直

で、『太陽』の舞台である東京・文京区に長く住んでいたことを紹介。作品には有名な出版社や印刷会社が登場し、「地元の人間として当時の様子を確認できる面白さがある。日本の労働運動を見直す意味でも、きちんと読みなおしてほしい」。またドイツへ旅行した際、ナチスが1933年に行った焚書事件で、翻訳された『太陽』が

熊本市で講演会 研究者ら再評価求める

焼かれていたことを知り、「徳永の作品にはスケールの大きな社会が描かれている。だから世界の読者に受け入れられた」と指摘した。

中島さんは、このほか1923年の関東大震災直後に起きた朝鮮人虐殺を題材にした『追憶』を取り上げた。作品が書かれたのは46年。震災から戦後まで「23年間、書けなかった」とした徳永に対し「書けない時代だったこともあるだろう」としながらも、「徳永には震災から終戦までが『ひとつながり』に見えていることに非常に驚いた」と述べた。

一見、関係性がないようにみえる「震災」と「戦争」だが、間に「ヘイトスピーチ」が入ると「それらはつながって行く」と中島さん。『追憶』

の中では、「どこからともなく朝鮮人に気を付けろ」といううわさが流れ、拡散する。「せんとう用意」という言葉まで飛び出す。中島さんは「徳永は『歴史は最後に勝利するものがつくる』といったことを何度も書いている。現代を生きる私たちに、徳永は作品を通じて語りかけている。訴えかけている」と締めくくった。

プロレタリア文学の研究者で、三重大教育学部の和田崇准教授(35)は「熊本出身の作家」という共通点から、徳富蘆花と徳永を比較。蘆花の代表作『不如帰』と徳永の『太陽』が戦前、ドイツやフランスなど世界で翻訳されていることを示し「徳永は蘆花に匹敵する作家」と強調。「全集や記念館はないが、徳永はいま以上に評価されるべきだ」と訴えた。

講演会は県内外の有志でつくる「徳永直の会」(高木陽助会長)が主催した。

(飛松佐和子)



熊本市で講演した中島京子さん。「徳永直は私たちに作品を通じて語りかけている」と話した=県民交流館パレオ